



JAC GUNMA

公益社団法人

日本山岳会

群馬支部報

第4号

平成28年
7月20日

“山の日元年とマナスル60年”

公益社団法人日本山岳会群馬支部 支部長 田中 壯侖

平成28年4月29・30日、カトマンズで開催された「マナスル・ローツェ登頂60周年記念式典」に出席しました。ネパール大統領、ネパールヒマラヤ協会会長ほか関係者、日本からは、登頂者日下田実さんはじめ、在ネ日本大使、日本山岳会会長ほか山岳関係者、そしてシェルパや地元の人たちが多数参加し盛大に行われました。特に日下田さんのお話は、85歳という年齢を全く感じさせず、食料担当の苦労話、サマでの出来事、登頂隊員に選ばれた時のお気持ちなど、静かに謙虚に話されている姿は印象的でした。

式典に先立ち祝賀パレードが行われました。先頭には大きな昇り旗、笛・太鼓・鐘の楽団を乗せた車、オープンカーには日下田さんご家族が乗り、2台目のオープンカー、といっても鉄柵のついた小型トラックには私たち日本山岳会関係者、ついでローツェに登頂したスイス関係者やシェルパなどが続きました。前後には民族衣装を着た人々やお揃いのTシャツを着た数百人の市民が行列に加わり、道端の観光客も一緒に祭りを楽しんでいましたが、私にとっても思いがけない体験でした。

ネパールには“ヒマラヤ”以外これといった資源・産業はありません。8000m峰の登頂を記念し、25周年、50周年、60周年など記念式典が開催されますが、人々が祭りを楽しみながら、登山者や外国人を歓迎する意味は十分領け^{うなず}ます。そして、今回の短いカトマンズ滞在で最も感慨深かったのは、上空から朝日に輝くマナスルを間近に見た時と旧友や山行を共にしたシェルパと再会した時でした。

45年前、日本マナスル西壁登山隊は未踏の北西リッジから頂上を目指しました(写真)。横浜港から約10トンの隊荷を送り出してから約5カ月後、羽田

を飛び立ってから3カ月後、ポカラから11日間キャラバンし、ドメン・コーラにベースキャンプを建設してから62日後、二人の仲間が頂上に立ちました。希薄な空気にあえぎながらプラトーに最終キャンプを建設、明日の好天を祈りつつ見上げた山頂や赤茶けたチベットの山々は今でも目に焼き付いています。

これまでのマナスル登頂者は1067人(1956～2015)です。最近5年間では589人で、多い日には数十人が頂上に立っています。自動車が山奥まで入るようになり、ヘリコプターで直接サマに入ることも可能です。多くの人がヒマラヤ登山を楽しめるようになったことは素晴らしいことですが、地元の人たちとの触れ合いや楽しいキャラバンが失われてしまうことは残念な気がします。

8月11日は「山の日」です。山への思いや登り方は、人それぞれ異なりますが、“山に親しみ、山の恩恵に感謝する”気持ちはいつの時代も同じだと思えます。自分の“山”を大切にしてください。



マナスル西壁 (1971年)

平成28年度
支部総会

事業計画と予算を承認

自然保護、支部山行など活動本格化へ

5月18日、前橋市の群馬県社会福祉総合センターで平成28年度の通常総会が開かれた。委任を含め25人が出席した（総会時の会員数39人）。田中支部長のあいさつの後、議長に田中支部長、書記に根井事務局長を任命し議事に入った。

議案に沿って、まず平成27年度事業報告、決算報告、および会計監査報告が承認された。その後事務局より、平成28年度事業計画と予算案について、山フェスタ、山の日記念事業、四支部懇談会などを柱とする提案があり、いずれも原案通り承認された。

また山のグレーディングや稜線ロングトレイル調査などの受け皿となる群馬県山岳団体連絡協議会については、事務局から4月に発足した同協議会および参加の経緯について報告があり、同協議会会長である八木原会員より会の趣旨などについて補足説明があった（関連記事7面）。

さらに自然保護活動については、自然保護委員会より、8月、谷川岳での山の日記念イベントに家族自然観察ハイキングを山行委員会と合同実施するなど、今年度の計画について説明があった（関連記事4面）。

支部山行については山行委員会より、6月の神成山から来年2月の支部懇山行の直前下見まで、年4回の支部山行を実施する計画が説明された（関連記事6面）。

平成28年度日本山岳会群馬支部年間予定表

行事名	期日	場所	担当
群馬支部通常総会	5月18日	群馬県社会福祉総合センター(前橋)	事務局
群馬県山岳連盟総会	5月28日	群馬県社会福祉総合センター(前橋)	
第3回支部山行	6月5日	神成山(富岡)	山行委員会
日本山岳会通常総会	6月25日	TKP市ヶ谷	
日本山岳会自然保護全国集会	7月16～17日	高知	自然保護委員会
支部報第4号発行	7月20日		事務局
第17回支部例会	7月20日	高崎城址公民館(高崎)	事務局
山のグレーディング作業	～7月下旬		WG
ぐんま山フェスタ2016	8月6～7日	群馬県庁	事務局
山の日イベントin谷川岳	8月11日	谷川岳周辺(みなかみ町)	事務局 自然保護委員会
第4回支部山行	8月11日	谷川岳周辺(みなかみ町)	山行委員会
スカイビューウルトラトレイル	9月9～11日	武尊山周辺	(岳連)
日本山岳会支部合同会議	9月9～10日	東京	支部長・事務局
第18回支部例会	9月21日	群馬県社会福祉総合センター(前橋)	事務局
稜線ロングトレイル調査	～10月		WG
第5回支部山行	10～11月	尾瀬方面	山行委員会
第19回支部例会	11月16日	高崎城址公民館(高崎)	事務局
日本山岳会年次晩餐会	12月3日	京王プラザホテル(東京新宿)	
支部報第5号発行	1月18日		事務局
第20回支部例会・新年懇親会	1月18日	うたや	事務局
第6回支部山行	2月上旬	神成山	山行委員会
四支部合同懇談会・山行	2月18～19日	妙義グリーンホテル(富岡市)	実行委員会
第21回支部例会	3月15日	群馬県社会福祉総合センター(前橋)	事務局

リレーエッセイ④「座る山歩き」

山に入ることを入山、下りることを下山と呼ぶのは誰でも知っている。実は禅でもまったく同じ使い方をすることを知った。お寺の名前には迦葉山とか少林山というように、最初に寺の称号として山号を付けることが一般的だ。これは寺が山に建てられていることが多く、その山の名前で呼ばれるようになったからで、少林山達磨寺、迦葉山弥勒寺という具合になる。

一口に禅といってもさまざまあって、ここで取り上げているのは接心会のこと。接心会は1週間ほど寺にこもって修行をするもので、朝5時起床、5時半静坐、6時参禅…というように1日の日課がピシッと決まっている。参禅は法を継いだ老師

と行う一対一の間答で、これがいわゆる禅問答と呼ばれているものだが、結構、悪場を歩く時のような緊張を強いられるのである。

この接心会に参加するため寺に入ることを入山、終了して帰ることを下山と呼んでいるのである。入山前の緊張と下山後の開放感、達成感は山も接心会も随分と似ている。夢中で山を歩いている頃は気が付かなかったが最近、接心会に参加するようになって、山を歩くこともじっと座ることも同じようなもんだなと思うようになった。足腰の衰えか、年齢のせいかわからないが、これから「座る山歩き」に費やす時間が増えるような気がしている。

(宮川 勉)

神々の山嶺2題

山岳小説の域超え哲学へ

「エヴェレスト 神々の山嶺」(夢枕獏著 角川文庫)

大竹 諠長

なんと壮大な物語だろう。著者が構想してから20年。稿を起こしてから4年近く、原稿用紙1700枚を費やして完成したものだ。内容はまさに表題そのものを語っている。単なる山岳小説の域を超え、人の生き方やその目的、それに向かっての凄まじいばかりの努力とその価値観を問うている。ある種哲学的趣をも含んだ物語だ。

主人公は二人。「山に登らないなら死んだも同然。それも人が登ったことのないより難しいルートに登るのでなければ意味がない」と言い放つ山男、羽生。彼に反発しつつもその行動や考え方に次第に魅せられ最後までつきあう山岳カメラマン深町。深町の眼を通して羽生の人間像が浮かび上がる。

そこに冬季エヴェレスト8000メートルでの過酷な自然な描写(著者は取材、体験のため6回ヒマラヤを訪れている)と、それに挑む単独登攀者の行動と心理状態が丁寧に描かれる。烈風と雪崩、落石と酷寒(マイナス50度)の試練に耐え、氷壁と岩のわずかな隙間にテントを張り、寝袋の中に腰まで入れて膝をかかえて過ごす時間。孤独と極限状況と戦い、時に幻覚に悩まされつつ、自己の内面を見つめて思わずほとばしる独白。「…さあ、たちあがれ。いいか。やすむな。やすむなんておれはゆるさないぞ。やすむときは死ぬときだ。生きているあいだはやすまない。あしが動かなければ手であるけ、手が動かなければ指でゆけ…」

日常の平和な幸せよりも困難な登攀を絶えず追い求め、その達成に自己の存在意義を見出すという先鋭クライマーの究極の姿を描いている。読み進むうち、残りのページが少なくなり、終えてしまうのが惜しくなるような心持ちになる。

この二人の行動を太い縦糸とし、それにエヴェレスト初登頂の謎を秘めた古いカメラの行方、シェルパの人たちとの温かな、時にスリリングな関係、そして共通の女性との哀しいかわりなどを横糸に織り交せて展開されるストーリーに読者は引きずり込まれることになる。最後まで目が離せない。読み終わるとほっとため息が出る。

あとがきの中で著者は告白している。

「…書き残したことはありません。全部書いた。吐き出した。10歳の時から山に登って体内に溜め込

んできたものを全部出してしまった。それも正面から叩きつけるようにまっとうな山の話を書いた。変化球の山の話ではない。根限りのストレートだ。もう山の話は二度と書けないだろう。これだけの山岳小説はもう出ないだろう。誰にでも書けるというものではない…。本書を書くにあたって実に様々な方がたにお世話になった。1993年にエヴェレストのベースキャンプまで行った折、南西壁を狙っていた群馬岳連隊の八木原罔明さんにもお世話になってしまった。死にそうになってやっとたどり着いたベースキャンプでごちそうになったヤキソバの味は一生忘れられない。高山病でまともに食べることでできた喰いものがこの時のヤキソバであった。この時の群馬隊は冬季エヴェレスト南西壁の初登頂を果たしている…」

温故知新

緑山岳会の三人 ある表紙写真の背景

日本山岳写真協会会長 橋本 勝

石井スポーツの『THE EARTH』創刊40記念号の表紙に当時緑山岳会の3人の会員が。雲竜渓谷の氷柱(ツララ)の前での記念写真だ。

この号で登山技術専門学校の創設者の森田勝氏の特集を、元『山と溪谷』編集長の神長幹雄氏が「三つの神話」と題して書いている。

森田氏は私と同じ歳で、1937年の生まれだ。なつかしく神長さんの原稿を読ませてもらった。最後のページに画像提供ラムダ佐久間等とあった。佐久間氏は緑山岳会の会員でもある森田氏の先輩で、この貴重な55年前(1961年)の作品を発表してくれてたいへんうれしかった。

最近封切られ話題を呼んだ映画「神々の山嶺」羽生丈二のモデルは森田勝であり、すごい登山家だった。この映画の山岳撮影に、いつも日本山岳写真協会の大切な行事に来て下さる日本山岳協会会長の八木原罔明氏が山岳監修としてネパール現地での撮影に同行して指導された。

私たち山と写真の仲間たちはこの映画を誘い合って見に行った。佐久間さんの1枚の写真で、私は若き日の山を思い出すことができた。

佐久間さん神長さんありがとうございました。



左が森田勝氏、中央は宮沢淳三氏、右は小林利秋氏

自然観察会参加報告

自然保護委員長 北原 秀介

谷川岳氷河地形観察会

日本山岳会千葉支部主催

6月5日、千葉支部20人、群馬支部から北原が参加し、マチガ沢および一ノ倉沢で氷河地形観察会が地形学を専門とする千葉支部会員のこあぜたかし小疇 尚 明治大学名誉教授の解説のもと行われました。谷川岳ロープウェイ駅に集合したころは曇り空でしたが、マチガ沢に着く頃にはすっかり晴れ上がり、素晴らしい景観に恵まれました。総勢21人の大集団でしたが観光客もそれほど多くはなく、一般の方々にもご迷惑をお掛けすることもなく進行しました。

マチガ沢出合付近では、谷川岳の地質概要と主な構成岩石である花崗閃緑岩の成因や亀裂（シーティング）の解説を受け、一ノ倉沢に向かいました。

一ノ倉沢出合いで昼食後、主に左岸側を登り、例年よりもかなり後退した雪渓に向かい、ヒョングリ滝の最下部直近に到達し、ここで小疇先生から氷河期の谷川岳の様子と両岸に盛り上がるモレーンの解説がなされました。

私も半世紀近く前に地質学を専攻したにもかかわらず、新たな知識の収穫に嬉しい一日でした。



一ノ倉沢にて

「丸岩城址と高ジョッキ」自然観察会

群馬県山岳連盟主催

6月12日、一般参加46人と群馬岳連役員13人、そして浅間・吾妻エコツアーリズム協会からガイド1人の総勢60人となる大所帯の自然観察会でした。

群馬岳連役員の手11台に分乗して須賀尾峠まで行き、A・Bの2班に分かれ最初に高ジョッキに向か



ハツ場ふるさと館駐車場にて

いました。

1030mの峠から一気に1165mの尾根まで登り、その後は10～20m程度の昇降を繰り返しながら高ジョッキに至りました。ほとんど登山者のいない地域とのことでゴミなどの投棄物も非常に少ない登山道でした。主な植生はシロブナ、ミズナラで、他も全て落葉樹で秋の紅葉の素晴らしさがうかがえます。頂上ではエコツアーリズム協会のガイドから主に当地域に多い奇峯の成因等の説明を受け、いったん須賀尾峠間近まで下山し、戦国時代の城址があったとされる丸岩に向かいました。

丸岩は、ハツ場方面から見ると柱状節理の発達した安山岩溶岩で構成され登頂不可能なようですが、須賀尾峠側からは標高差100m程度で難なく登れる山でした。頂上は3つの段差があり、戦国時代はそれぞれに櫓が構築されていたとのことです。

たいへん盛況な自然観察会でしたが、人数が多すぎるため解説が行き届かないように感じました。せめて10人位のグループ分けができればと感じた次第ですが、午後から雨の予報にもかかわらず最後まで天気にも恵まれて、次回も参加したいと思わせるイベントでした。



丸岩

◆特集◆ 例会ショートスピーチ

撮り尽くせない風景
群馬の山を見つめて

加藤 仁

中学2年の夏、高原学校で榛名富士に登って以来数十年、歩いて山に登った記憶はない。写真家を生業にする前、どうしても撮りたい写真があり大水上山に登ったのが初めての登山だと言えるだろう。

利根川の最初の一滴、大水上山の三角雪田が利根川の源流だと知り、さまざまな資料を読み漁った。行ける！と確信し、8月に新潟県六日町の十字峡へ。ザックには大判カメラと三脚、水だけを収め、初めての山道に入った。無我夢中で登る道はどんどんきつくなり、追い越していく登山者が恨めしく、撮影中とばかりに三脚を広げ休憩を取ることが多くなった。

丹後山の避難小屋で1泊することなど考えも及ばない。日没前に三角雪田まで行き、利根川源流最初の一滴をカメラに収めることしか頭になかった。ひたすら大水上山を目指し歩き続けた。そして、念願かない大水上山の頂に立つことができた。

大判カメラを三脚にセットし、三角雪田から湧け出す水滴を探し、ようやく1滴の水を撮ることができた。

だが感動はそこまで、撮影を終え十字峡にたどり着いたのは午後8時、無謀な撮影行は奇跡的に無事終えたが、きつい登りと、重いザックに翻弄されたその日以来、山行とは縁を切った。

だが縁とは不思議なもので、群馬県が制定した「ぐんま百名山」の取材を引き受けることになった。ひと月に1山、山を選び、山に登り撮影する、そんな日常が思いがけず始まった。

山登りは性に合わない、そう決めていた山登りを続けるうちに、山への思いも少しずつ変化していった。まして、ふるさと群馬の山。今まで知ることなかった歴史や文化を知ることになり、山を通じてふるさとを見直すことができたように思う。

県が制定した百名山を完登し、その100山の写真を色々に撮ることもできた。だが山の姿は一つではない。季節によって違い、天候によって、時刻によって、山は様々な姿を見せる。およそ300山ある群



思いの利根源流

馬の山だけと限っても、撮り尽くせない風景があるはずだ。

美しい山容、美しい花や紅葉の時期、素晴らしい展望はもちろん、貴重な動植物や歴史的に貴重な遺物など、撮りたいもの、撮りたい山を求めて、これからは写真を撮ることを生業として自然を見つめていきたいと思う。
(2016年6月15日)

山スキー賛歌

小野里節司

山スキーは47歳から始めた。28年経った。今年の5月、ゴールデンウィークは立山の室堂山荘に2泊して付近の山を滑った。

シールを付けて早朝登っていると、稜線でヘリが人を吊り揚げているのが小さく見えた。2日間真冬並みだったので、真砂岳あたりで2人遭難死のテレビニュースがあった。

山スキーは何が一番かと言われれば、浮遊感だ。1月に5年通った青森の岩木山頂から標高差1400mの大黒沢は広くスピード感が狂う。

風呂に入り、後はビールと酒。これで幸せいっぱい！



支部山行

神成山 支部懇下見も兼ね 夏は谷川、晩秋には尾瀬を予定

6月5日(日)「神成山ハイキングコース」(富岡アルプス)で、第3回支部山行が実施されました。今回は、来年2月に群馬で開催される四支部合同懇談会山行のコース下見を兼ねて11人の参加で行いました。



大サボテンの家登山口より出発。標高320mほどの低山ながら程よいアップダウンがあり、登るたびに景色が見渡せ、楽しみが連続する尾根歩きでした。2月当日を想定し、トイレの場所や休憩ポイント、危険箇所、歩くペースなど、様々な観点で意見を交わしながら進みました。コースには、石碑や城跡。ビューポイントからは稲倉山、小沢岳など西上州の山々がどっしり姿を見せます。標識等も整備されていて、地元の人に大切にされている様子が見えました。

「日本一きれいなハイキングコース」との触れ込みの西上州神成山九連峰。距離・時間的にもちょうどよく、「第一候補?」そんな話題で盛り上がりを見せた楽しい山行でした。

次回の支部山行は、8月11日「山の日記念イベント」に合わせ、自然保護委員会と合同実施。谷川山麓を歩きながら山の生い立ちや森の植生などを学びながら歩きます。また、10月下旬～11月「尾瀬クラシックルート」鳩待峠～富士見峠～富士見下(1泊)。さらに、2月上旬、四支部合同懇談会山行の本番に向けた直前山行。年度内4回の支部山行を計画的に実施していきますので、都合のつく方はふるってご参加ください。(支部山行委員長 田中 規王)

チャレンジキッズ前武尊

子どもたちと元気にスノーシュー登山

群馬県山岳連盟が継続している行事、チャレンジキッズが3月27日オグナ武尊スキー場から前武尊往復のスノーシュー登山として行われた。

子ども7人、付き添いの親8人、それにスタッフが7人の総勢22人。群馬支部からは根井さん、田中則王さんと私がスタッフとして参加。田中さんはお子さんも参加していた。

今年は記録的な少雪の年で、センターハウス付近はほとんど雪が無く、1コースのみかろうじて滑れる状態が維持されていた。

雪が無いとスノーシュー登山は出来ない。そのためスキー場から、全員にスキー一式とリフト券を無償提供という提案があった。

前武尊山頂が2040m、センターハウスが1240m、当初は800mを約2時間半かけて登る予定だったが4分の1の210m程登ればよくなった。すこし物足りない気がしないでもないが朗報だ。

リフトを4回乗り継いで1828mのリフト山頂駅まで上がる。もう周りは銀世界。慣れないスノーシュー着けをワイワイ楽しんで、リフト終点上の急斜面を登りだす。ここは前武尊から南東に延びる尾根で結構急斜面だが、子どもたちは元気に登り、ちょうど1時間で前武尊山頂に着いた。その頃から頭上が晴れてきて、時々、剣ヶ峰や家ノ串山が霧の間から顔を出した。



スノーシューは慣れないと下りが大変。ゆっくりと慎重に山頂駅に降りる。ここからはスキーに履き替えて下まで滑るが、ほとんどの子どもたちは元気よく、親ともどもスイスイと降りていった。

私を含め数人が、後ろを付いていくのが精一杯、どちらが付き添いか分からなくなってしまった。しかし子どもたちからたくさん元気がもらえた、楽しい1日だった。(中山 達也)

私のおすすめ

越前大野 経ヶ岳 (300名山)

小野里節司

福井市で視察パーティーと分かれ、レンタカーで2人、越前大野へ。20年前荒島岳に登った時と同じ扇家泊。

梅雨時にもかからず翌日は快晴。保月山登山口からいきなり急登、杓子岳付近でロープ付きの岩場があった。

1625mの山頂から沢に残雪の白山が見えた。往復6時間10分。大野市の居酒屋「ひろけん」は、酒(花垣)も料理も旨し。

(6月11日)



「群馬県山岳団体連絡協議会発足」にあたり

八木原 圀明

残念ながら今登山の世界も相当な高齢化時代を迎えています。少子化が進み、人口減時代になりました。遊びや生活の楽しみ方は様々です。他人様の趣味を強制出来るわけがありません。そのわりには登山愛好者、自然の中での運動、活動が好きな人たちは多いと言えます。自然志向、健康志向でしょうか？同好の士が多いことは喜ばしいことです。

ただそのみなさんは山岳会などに入っている山登りを好みません。昔であれば山岳会に入り先輩に鍛えられ、しごかれて一人前の登山者、クライマーに育ち、日本の山を、岩壁を登りヨーロッパアルプスやヒマラヤを夢見てがんばり、実現してきました。

未踏の山、未登の岩壁があり命を懸けて仲間や数いるライバルたちと競い合っている価値ある目標、対象があった時代がありました。そういった目標が無くなった(?)時代に山を登る人たちはそこまでがむしゃらに突っ張らなくとも楽しむことが出来る



4月14日県青少年会館で開かれた群馬県山岳団体連絡協議会設立総会
 県山岳団体連絡協議会は県山岳連盟、県勤労者山岳連盟と日本山岳会群馬支部によって設立された。会長には支部会員で日山協・岳連の八木原圀明会長が、副会長には田中支部長が県勤労者山岳連盟の清水会長とともに就任し、支部からはさらに4人の理事(北原、荒木、中山、黛)と事務局長(根井)、会計(齊藤裕)が加わっている。連絡協では現在、山のグレーディング、ぐんま県境稜線トレイルの実地調査、みなかみ町での山の日イベントなどに取り組んでいる。

時代になりました。

山案内人という名で^{だんな}旦那の荷物を担ぎ、山に案内していた時代から、今では登山を趣味としてきた人たちが「ガイド」という名前で登山を職業とし、何とか食べる時代が来ました。自ら計画せずガイドに頼って登る人たちまで日本に現れて久しい。命懸けの登山をする訳では無いので、近くにいる親しい友だちと登れば良い、と思う人たちも増えました。

そういう時代の中では山岳団体が協調、団結し、力を出し合い、活動をしなくてはならない時代になったということです。

来年2月 群馬で初の「四支部懇」

来年2月、千葉、茨城、栃木、群馬四支部の合同懇談会(四支部懇)が群馬で開かれる。この懇談会は毎年、各支部持ち回りでそれぞれの地元で開催している年一度の支部を超えた懇親行事。

この「一大イベント」に向け、3月の第15回例会で田中支部長を委員長とする実行委員会を設け準備を進めることを決め、総会前の5月14日、第1回の実行委員会が開かれた。

実行委員会は総務、会計、講演会、山行、観光、宿泊の各担当に分かれ、7月2日の第2回会議を経て、具体的な検討を重ねている。7月の例会にその概要を示し、詳細をつめた後、各支部への案内を行う予定。

なお、懇談会は平成29年2月18・19日の土日、富岡市の妙義グリーンホテルをベースに、講演会、懇談会、山行・観光などを予定している。

25年ぶりの復活「逍遙」稲倉山 (第2回支部山行)

昨年の9月に40年間勤めあげた会社を退職した。再就職の職場が同じ社屋にあるものだから退職の実感は薄いものの、大きな節目であることは自覚した。で、始めたのがウォーキング。「もう一度」という山歩き

の復活を密かに期したのもでもあった。かつての職場では「自然逍遙会」というサークルを、群馬支部事務局長の根井君、一緒に入会した宮川君らとでっち上げた。出身大学にあったサークルの名を無断借用。中高年登山の時流に乗ったのか、結構、仲間も集まり職場でも一目置かれる同好の会となったが、根が浮気性なもので他の「逍遙」に走り、山の「逍遙」からは遠ざかっていた。山との疎遠は40代前半のこと

ではないかと思う。

このため、稲倉山はざっと数えて四半世紀ぶりの「本格的」山登り。埃まみれの山道具を天袋から引っ張り出したら山靴にはヒビが入り、雨具も使い物にならない。とりあえず、ストックと山靴だけは前日までに購入。押取り刀で駆けつけた次第だ。結果はやっぱり、きつかった。記憶に残るのは先行者の踏み跡だけ。苦行のような復活「逍遙」となった。

帰って頂上で撮った写真を見た。破顔した己の姿がある。両手で「2」と「5」を示し、「25年ぶり」をアピールしている=写真。苦汁が快感になったということなのか。我ながら「いい顔してる」と思った。(武尾 誠)



事務局だより

【活動・事業・イベント報告】

〈2016年1月〉

■第14回例会・新年会（1／20 前橋・うたや）
〈2月〉

■千葉・茨城・栃木・群馬四支部合同懇談会（2／6・7 茨城・大洗）

〈3月〉

■木暮理太郎翁の足跡を語り継ぐ会総会（3／6 太田・強戸行政センター）

■第2回支部山行（3／13 西上州・稲倉山）

関連記事7面

■第15回例会（3／16 高崎・城址公民館）

- ・四支部合同懇談会、山フェスタについて
- ・木暮理太郎を語り継ぐ会との交流事業について
- ・グレーディング、ロングトレイルについて
- ・山の日イベントへの取り組みについて
- ・県山岳団体連絡協議会への参画について
- ・ショートスピーチ（加藤仁会員）ほか

■山のグレーディング作成に向けた検討会議（3／25 前橋・群馬県庁）

■チャレンジキッズ（スノーシュー登山 3／27 前武尊山） 関連記事6面

〈4月〉

■日本山岳会全国支部懇談会（4／9・10 新潟・岩室）

■群馬県山岳団体連絡協議会設立総会（4／14 前橋・県青少年会館） 関連記事7面

■マナスル初登頂60周年記念式典（4／30 カトマンズ） 参加：田中壯・八木原 関連記事1面

〈5月〉

■稜線トレイル調査WG第1回会合（5／9 前橋・総合福祉会館）

■支部懇実行委員会（5／14 高崎・城址公民館）

■平成28年度通常総会・第16回例会（5／18 前橋・県社会福祉総合センター） 関連記事2面

〈6月〉

■第3回支部山行 神成山（6／5 富岡）

関連記事6面

■稜線トレイル検討委員会設立総会・記念講演会（6／22 前橋・市町村会館）

■日本山岳会総会（6／25 東京・JICA市ヶ谷ビル）
〈7月〉

■支部懇実行委員会（7／2 高崎・城址公民館）

■平成28年度自然保護全国集会（7／16・17 高知） 参加：北原

【今後の予定（7月20日以降）】 ※場所等変更あり
〈7月〉

■第17回例会（7／20 高崎・城址公民館）

〈8月〉

■山フェスタ2016（8／6・7 前橋・群馬県庁）

■山の日イベントin谷川岳 第4回支部山行併催（8／11 谷川岳周辺）

〈9月〉

■上州武尊山スカイビューウルトラトレイル（9／10～12 上州武尊山）

■日本山岳会支部合同会議（9／10・11 東京）

■第18回例会（9／21 前橋・県社会福祉総合センター）

〈10月〉

■岳連県民登山（10／30 赤城山）

〈11月〉

■第19回例会（11／16 高崎・城址公民館）

■第5回支部山行（日程未定・尾瀬方面）

〈12月〉

■日本山岳会年次晩餐会（12／3 東京）

【新入会員】

小池 千秋（前橋市） 大家千枝子（高崎市）

【訃報】

新井陽一郎副会長（安中市） 6月13日逝去 75歳
謹んでお悔やみ申し上げます。

【寄稿のお願い】

山行報告・評論・随筆など会員のみなさまからの原稿をお待ちしています。原稿送付先は下記のとおりです。

根井 康雄（日本山岳会群馬支部事務局長）
※日本山岳会各支部、各種山岳団体で支部報、会報等お送りいただく場合もこちらへお願いします。

日本山岳会群馬支部報 第4号 2016年7月20日

発行：公益社団法人 日本山岳会群馬支部

Tel 027-323-6713

〒370-0844 高崎市和田多中町11-31(田中方)

発行者：田中 壯 編集者：根井 康雄

印刷：上武印刷株式会社